■特集・佐佐木幸綱歌集『テオが来た日』『春のテオドール』

正岡子規の犬

復本一郎

佐佐木幸綱先生の御歌集『春のテオドール』の「あとがき」に見える、

この歌集を編集する過程で、全体にわたって、一首中の漢字を減らして平仮名を多くした。日常的にワープロをつかう機会がふえたせいもあって、私にかぎったことではないが、一般的に短歌の表記に漢字が多くなったような気がする。漢字が多いと、無意識的に読みが早くなる。意味をまず読み取ろうとする意識がはたらくからだろう。

との一節に、一研究者として大きな衝撃を受けた。この指摘を重く受け止めつつ、以下の拙文を綴らせていただく。

＊

今年は、子規の百二十回忌。その子規に、当時の庶民生活が髣髴とする人と犬との交流を伝えるエピソードがある。そのエピソードを紹介させていただく。

子規の第一高等中学校時代の友人に吉田匡なる人物がいた。泥酔して余所（よそ）の下宿屋へ入り込み、巡査や探偵に追い掛けられるといったなかなかの人物である。後輩ではあるが、子規と気が合ったのであろう。明治二十二年（一八八九）四月三日から七日にかけて、二人で『水戸紀行』の旅に出かけている。水戸街道の松戸駅から一里余の小金駅でのエピソードである。子規の『水戸紀行』より引き写してみる。

道の傍に四、五人の子供うちむれ遊びゐけるが、其中に七、八歳許りなる女の子の、身はつゞれをまとひいときたなげなるが、頻りに守り歌を歌ひながら足ぶみしゐけり。其背中に負はれし子の頭ばかり見えたるが、白くて小さし。いぶかしければ立ち寄りて見るに、小さき犬の子なりければ、おかしくもあり面白くもあり。

犬の子を負ふた子供や桃の花

光景が目に浮かんでくる。四、五人の遊び仲間。その中の、今で言うならば、小学校一年生くらいの女の子が、子守歌を歌い、体を揺らしながら、小児を寝かせつけているのである。背中の子供の頭が少し見えたが、白くて、小さい。子規が、不思議に思ってよく見ると、子犬だったという。女の子によく馴れて、おとなしくしていたのであろう。子規は、ほほえましく思い、「おかしくもあり面白くもあり」との感想をもらしている。そして詠んだのが〈犬の子を〉の一句であった。明治二十二年の作であるので、俳句を作りはじめてから間もないころの作品であり、子規の自筆句稿『寒山落木』には収録されていない。が、実景をそのまま素直に詠んだ句であり、悪くはない。「桃の花」は、そのあたりに咲いていたのであろう。切字の「や」が活かされている。この句の別案が伝わっている。

犬の子がねいるものかや子守歌

こちらは駄目である。理屈っぽい上に、「子がね」に地名「小金」